OKADA-ROOM Vol.24
「色が見えすぎてその取捨に困る」―岡田三郎助の色彩

会期　2022 年 6 月 3 日（金）～8 月 14 日（日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。

岡田三郎助の作品の特色の一つに、色彩表現の美しさが挙げられます。明治 27 年（1894 年）にフランス留学から帰国したばかりの黒田清輝、久米桂一郎と出会った岡田は、彼らの薫陶を受け、外光下での明るい色彩表現に開眼していきます。自身もフランスで学び、色彩に対する感性にさらに磨きをかけた岡田は、黒田らの組織した新風洋画団体「白馬会」に加わり、その優美な色調と気品に満ちた画風で洋画界で重きをなしました。岡田の弟子である岩田藤七（いわた・とうしち、1893～1980）は、「私は色が見えすぎてその取捨に困る」と岡田が語っていたと述懐しています。その言葉通り、岡田の約 50 年にわたる画業は、色彩への飽くなき探求を通じて、自身の理想美を追い求めることに捧げられた生涯であったと言えるでしょう。

本展では、岡田の用いた色彩に注目し、初期から晩年までの作品にみる色遣いの変遷を、館蔵を中心とした岡田の名品から御紹介します。初期の名作《矢調べ》、岩絵具を用いた《コローの池》、色遣いの洗練を極めた晩年の傑作《裸婦》など 15 点を通して、岡田の薫り高い色彩表現の精華をお楽しみください。

No.	作品名	英訳	作者名	制作年	サイズ	材質	所蔵等
初期―褐色							
1	中野多津(なかのたつ)像	Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin	岡田三郎助	1893（明治 26）頃	85.0×54.8	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
	長崎県・神奈川県の知事を務めた岡田の叔父、中野健明(なかのたけあき)の娘・多津を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、岡田と家族ぐるみでの付き合いがあったようである。当時の岡田は画塾で修行中であり、色彩も暗くまだ筆運びに生硬さは見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女の表情を、縁者ならではの親しみをもって誠実に描き取っている。						
2	矢調べ	Testing arrows	岡田三郎助	1893（明治 26）	72.5×105.0	油彩・カンヴァス	館蔵
	明治 26（1893）年、堀江正章が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、のちに花開く優れた色彩感覚の片鱗を見ることができる。 岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と後年回想している。（佐賀県重要文化財）						
色彩への目覚め							
3	大磯風景	Landscape of Oiso	岡田三郎助	1894（明治 27）	36.0×25.0	油彩・板	館蔵
	神奈川県の大磯に取材した作品。岡田は本作を制作した 1894（明治 27）年に初めて黒田清輝を知り、その明るい画風に大きく影響されるが、本作はその感化を受ける以前の作例といえる。右下の書き入れから、画家がのち 1937（昭和 12）年に文化勲章を受けたおりに、受章記念として父方の石尾家へ贈呈した作品であると考えられ、とりわけ思い入れのあった一枚と思われる。						

No.	作品名	英訳	作者名	制作年	サイズ	材質	所蔵等
4	自画像	Self-portrait	岡田三郎助	1899 （明治 32）	48.0×37.0	油彩・ カンヴァス	館蔵

1897（明治 30）年から約 4 年、岡田は文部省留学生としてフランス・パリに赴き油彩画を学んだ。本作は留学中のパリで描かれたもので、日本にいる家族に贈り近況を知らせる目的もあったようである。
褐色と黒を基調とした重厚な雰囲気の画面で、留学中の作品にしては色遣いは抑制的だが、おそらくヨーロッパの正統的なアカデミズムに基づく人物の描法を試みようとしたのであろう。
本作は現存が確認できる、岡田の唯一の油彩による自画像であり、その意味でも貴重な作例である。

5	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1900 （明治 33）	45.4×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵

本作は留学 3 年目に描かれたもので、同構図の作品が東京藝術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するということも学んだのであった。

白馬会の色彩―調和と自然

6	ぬいとり	Embroidery	岡田三郎助	1914 （大正 3）	72.7×42.4	油彩・ カンヴァス	館蔵

明治 39（1906）年、岡田は劇作家小山内薫の妹、八千代と結婚し、渋谷に新居を構えた。本作はそのアトリエの応接室内で刺繍にいそしむ妻を描いた作品。室内のインテリアや八千代の面差しの綿密な描写もさることながら、とりわけ手先の表情が丁寧に描かれており、プライベートで親密な雰囲気のなかに岡田の充実した画力が伺える名作である。
色遣いも巧みで、オレンジを基調とした暖かな背景の中、八千代の纏う紫陽花柄の着物の青が瑞々しい印象をもたらしている。

7	薊（あざみ）	Thistles	岡田三郎助	1908 （明治 41）	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵

第 12 回白馬会展への出品作。読書中に物思いにふける情景であろうか。女性の背後にはアザミの葉やキキョウが配され、秋の一こまであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する非常に鋭敏な感覚を見て取ることができる。
この時期、岡田は画面一杯を覆う植物の背景と着物をまとった女性の取り合わせを好んで画題とした。

8	桃の林 （大石田横山村）	Peach Garden （Yokoyama-mura, Oishida）	岡田三郎助	1917 （大正 6）	50.0×60.6	油彩・カンヴァス	館蔵

山形県北村山郡横山村（現在の大石田町）には、りんごや桃、桜、すもも、梨の木が茂る広大な果樹園があった。知人にここを紹介された岡田はすっかり気に入り、本作を描いた。明るい陽光、霞がかった空に向かって枝を伸ばす桃の木々が多彩な緑の諧調によるリズミカルなタッチの厚塗りで表現され、見る人にみなぎる生命力を伝える。

No.	作品名	英訳	作者名	制作年	サイズ	材質	所蔵等
9	伊豆山風景	Landscape of Izusan	岡田三郎助	1935 (昭和 10)	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵

1935（昭和 10）年、岡田は伊豆・熱海を訪れ、本作や《淙々園にて》（No.10）などの作品を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。空気遠近法を思わせる山並みの柔らかい青の諧調、穏やかな海面にきらめく光、深い緑による森や木々の量感ある描写など、色彩の画家・岡田の面目躍如たる質の高い風景画に仕上がっている。

10	淙々園にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935 (昭和 10)	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）

滞在していた旅館から、《伊豆山風景》（No.9）と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。
モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。読書にふける姿は、柔和ながら凛とした雰囲気を漂わせる。

円熟―金と銀

11	少女	Portrait of a Girl	岡田三郎助	1932 （昭和 7）	53.0×33.5	油彩・ カンヴァス	個人蔵（寄託）

岡田は上品、優美な女性像を数多く描き「美人画の岡田」と称された。本作は金地を背景に着物をまとって立つ横向きの女性像という、「美人画の岡田」らしい美意識がみなぎる一品である。女性が纏う着物は「紅縮緬地垣に葵熨斗模様小袖」（現所蔵：J フロントリテイリング史料館）とみられ、岡田がモデルに蒐集品の着物を纏わせた作例でもある。背景には金箔と金泥が併用されている。

12	コローの池	Corot's Pond	岡田三郎助	1931 (昭和 6)	25.0×43.5	岩絵具・ カンヴァス	個人蔵（寄託）

二度目のヨーロッパ滞在中に、岡田は敬愛するバルビゾン派の画家、カミーユ・コローの暮らしたパリ近郊の湖に滞在し、制作を行った。
この湖畔で描かれたと伝わる作品は数点残っているが、本作は日本の伝統的な画材である岩絵具で描かれた珍しい作例である。おそらく現地でのスケッチなどを元に、帰国してから制作したのであろう。湖面には銀泥、右下の土手部分には金泥が使われており、その鈍い輝きは、コローの得意とした銀灰色の風景表現を彷彿とさせる。

頂点―豊麗なる色彩

13	裸 婦	Nude	岡田三郎助	1935 (昭和 10)	99.8×65.5	油彩・ カンヴァス	館蔵

1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。
とりわけ色彩表現の巧みさは際立っており、裸婦の肌の下にはピンクやオレンジ、緑、紫などの色が複雑に塗り重ねられ、血の通った肉体の生命感が表現されている。さらに周囲には赤や青、緑などの原色が配置され、その中心に位置する裸婦の輝くような肌の白さを鮮やかに際立たせている。

No.	作品名	英訳	作者名	制作年	サイズ	材質	所蔵等
14	薔薇	Roses	岡田三郎助	1931(昭和6)	45.5×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵

バラは岡田が特に好んだ題材で、彼は生涯を通してこの花を非常に多く描いている。本作はその中でも、飽くことなく眺めていたくなるような深みと親しみやすさをそなえた、味わい深い一枚である。岡田が愛した白やピンク、オレンジで描かれた華やかなバラの花々は、今にも絵の外にまで芳香を放つかのようである。
額縁は《丹霞郷》と同じく、裂をあしらい、外枠に漆を塗った凝った作りで、岡田自身による見立てである。岡田は裂や着物の収集家であったが、額に古裂を用いて作品と組み合わせ、その調和を楽しむこともあった。

15	絵具箱・パレット	Palette and Paintbox	岡田三郎助愛用			木製	館蔵

岡田が実際に制作に使用していたパレットである。裏面に「1897Paris」とのサインがあり、留学の際にパリで入手したものであると考えられる。中央部分には、白色を混色して作られた淡い黄色やピンク、緑の絵具が残されており、岡田が描く女性の艶やかな肌に使われる色の数々を思わせる。
絵具箱には「昭和14年5月16日岡田三郎助」と直筆の署名がある。

岡田三郎助アトリエ・女子洋画研究所
（県立博物館東側）

岡田三郎助は、1908（明治41）年から1939（昭和14）年まで、現在の東京都渋谷区恵比寿で暮らし、制作に打ち込みました。自宅に隣接したアトリエは木造の洋風建築で、岡田の没後は洋画家の辻永（つじ・ひさし）が譲り受けました。その後、辻家の人々により守られた後、2018（平成30）年に佐賀県立博物館東隣に移築・復原されました。
このアトリエで岡田の名作の数々が誕生し、またその一室は、彼が主宰した画塾「女子洋画研究所」の教室として使用され、数多の女性画家たちが巣立ちました。
御来館の際は、ぜひアトリエもあわせて御見学ください。

佐賀県立美術館
〒840-0041　佐賀県佐賀市城内1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX.　0952-25-7006
E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp　Web. http://saga-museum.jp/museum/